的先鋭 の学生 ないこ デオロ 大衆の の一致 して学 意志を なけれ 行動の 意味し してい その規 運動形 んずく ること 性はそ ことに 等にお き、又 題も政 化させ をみい 要求を で発展 な「身 曲する 動の基本的立脚点を掘り崩すものでしかない。

第二は、「層としての学生運動」の独自的展開は、独自に他の諸階層の運動との関連を内包しているのであり、学生層が労働者階級を中核とする統一戦線の一翼を担いうるし、又担わねばならないということである。全国民的政治課題はもとより、教育闘争においても、学生運動は統一戦線の形成と推進の自覚的一翼たることによって真にその力量を発揮しうるのである。第三は、統一戦線運動における学生運動の役割である。学生は、比較的高い全国的等質性、直接的生産関係から自立していることからする行動の機動性、理論的反応の高さ、青年としての積極性の性質からして、層としての学生運動における先駆的役割を果しうるのである。だが、この先駆性を絶対化し、先駆性を主導性と取り違えることは、（統一戦線の主導性は労働者階級以外にはない）学生運動の小ブル急進主義化を必然化する以外にない。（かっての安保ブントの導火線論、現在の三派の運動論等の誤謬）

学生運動の組織形態 自治会と単一全学連

内容を とは、戦 盟制自 全学連 た。全 ての運 あり全 同一性 的統一 れを不 のであ の本来 を包含 、今日 三つも 常さと のであ 別に色わけされ、三派にいたっては自ら三派「全学連」と名乗るに至っては「全学連」の基本性格の最後の一片すらも放棄しているのである。

全員加盟制自治会は、敗戦直後の状況の下で学生生活の擁護と民主的学園復興のためのいわば「同業組合的」性格のものとして結成されつつ、その後の発展と共に、「無党派統一政治機関」の性格を獲得していったのである。この全員加盟制自治会の二重的性格は、層としての学生運動の自然的・即自的基盤と意識的・対自的態様の二重性を反映するものであり、それをいずれかの一面に固定化するのではなく、運動と組織の重層的構造のうちに不断に止揚されるべきものである。

大衆的民主主義的学生同盟—同盟員を中核とする自治会政策グループ（「統一会議」）、クラス研究会・クラス行動組織—全学的行動組織（闘争委員会等）、クラス—代議員会・自治委員会—自治会執行部、自治会の多様な専門部（文化部、厚生部等）という重層的立体的な運動構造の形成は現在にあって「層としての学生運動」の展開に不可欠である。とくに「層としての学生運動」の指導的中核部隊＝戦闘的大衆的民主的同盟の質的量的強化は重要な位置を占めている。層としてこの学生運動を確保するこのような運動の構築の困難な任務を自ら放棄し、先鋭（？）部分層のみによる運動を「戦闘的反帝学生運動」と自称することによって自己を免罪する傾向、さらには「ポツダム自治会の克服」を号叫し、全員加盟制自治会を否定する傾向は断固として拒否されねばならない。と同時に、学生自治会を身のまわりの要求をとりあげる「サービス機関」に矮小化する傾向（民青派）は、戦後学生運動の戦闘的伝統の名において断罪されなければならない。

七〇年安保闘争へ

「層としての学生運動」は、このように、学生層の潜在的同質性を基礎とし、学生の「平和と民主主義」の意識に支えられた大衆的民主主義的運動であった。だが、学生運動は全体としての民主主義闘争の各段階での基本性格と構造に規定され、その層としての運動の同質性の発現の形態において、その戦闘性と有効性を発揮した市民主義的「平和と民主主義」意識と運動は今日大きな限界性を露呈している。

だが、このことは三派のいう「今日においては平和と民主主義では戦いえなくなった」のでは決してない。問題の全核心は「今日の情勢に即応する新たな質と内容を獲得した平和と民主主義の闘争をどのように形成するか」である。そして、このことこそ「層としての学生運動」の今日的再生を可能にする基本的視点である。今日獲得されるべき運動の新たな質と内容については、我々は政治方針において基本的に明らかにしえたと考える。

激動を告げる内外情勢の中にあって、自治会共闘をたゆみなく強化し、「層としての学生運動」の戦闘的再生を勝ちとろう。現在の複数「全学連」の存在という不幸な事態を克服し、単一全学連再建に全力を傾けよう。七〇年安保闘争にむけて、「層としての学生運動」の戦闘的再生と単一全学連の実現の主体的担い手として戦闘的大衆的学生運動を構築することは、科学と真理の担い手たるすべての学生の責務である。なんとならば、かの革命詩人のいうごとく「知恵の女神は武装していた」（ハインリッヒ・ハイネ）。

外大支部結成宣言

は、明確に新たな局面を迎えている。
た地平が切り開かれた。神戸でも自治会共闘の前進は、民青系諸君の日
諸君の力量低下を克服し、そして一切のセクト主義を拒否した原則的かつ
展開された。しかも闘争を担った部隊は、わが神外大を中心とする活動家
自然発生的な闘いの限界を含みつつ学生戦線統一母体形成の契機であった
〇年安保闘争を目的意識的に闘う強固な拠点を、早急に神戸の地で構築す
いる。その第一歩が民学同神外大支部結成によって大きく示され、兵庫学
力たるであろう。
任務は、第一に、自治会執行部＝民青の日和見主義、政治的破産を早急に克
第二には、兵庫県学連の強化、更に新たな高揚局面を切り開くことであり
組織の確立である。
的和平への追撃戦・国内の侵略拠点撃破戦を強力に展開する中で、必ずや

日

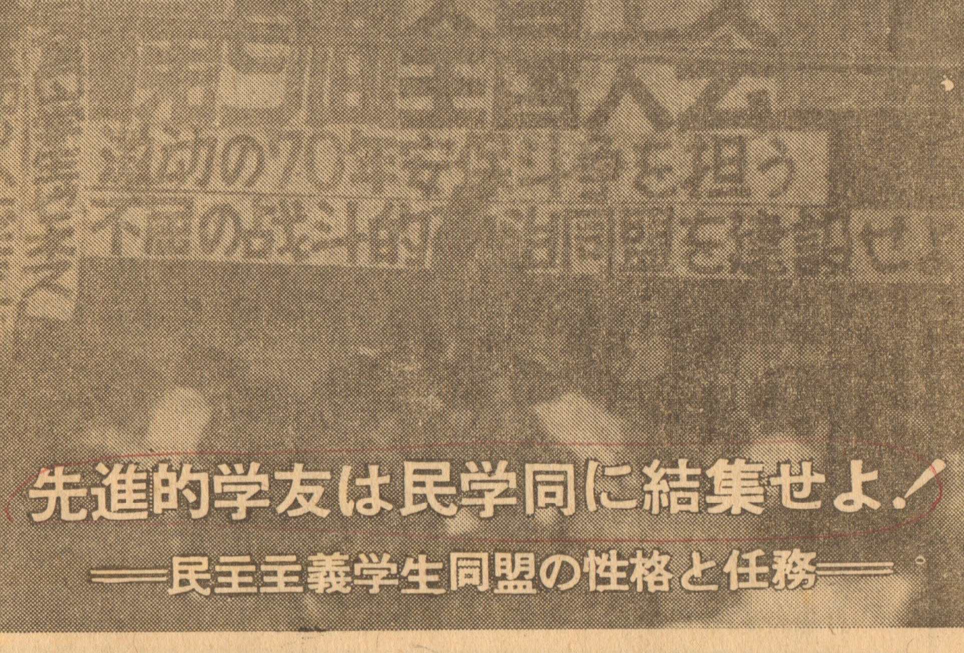
民主主義学生同盟神戸外大支部

三重の 的なス の証明 犯佐藤 る内外 強化に 。即ち べく阻 、学生 によっ への無 られて 名（市民十四名を含む）その内判事拘留者三十四名、警棒の乱打という弾圧の下自治会共闘の学生は二十八日、三十一日、四月一日で五十名を越える逮捕者、八十数名にもおよぶ負傷者を出したのであった。

都知事、区議会の開設反対の行動、組織された市民の活性化、榎本氏虐殺抗議の世論、全国動員による巨大な抗議行動の連日にわたる展開が佐藤を危機感に駆り立てたのである。

反動佐藤の弾圧攻勢は、四月三日の東京地検、同高検、最高検の頂上会談（三派系『全学連』に暴力団並みの一斉検挙、騒乱罪適用の検討）、四月十一日の北区連絡会議へのデモ禁止処分（「秩序妨害」の危険ありとの一方的判断でのデモ禁止）そして特に、文部省招集による国立各学部長会議で学生運動弾圧と大学自治破壊（大管法の実質化）の攻勢を展開してきた。

われわれはベトナム戦犯佐藤内閣を追撃し、打倒すべくこの四月闘争の爆発的昂揚をかちとらねばならない。


全国大会
激動の70年安保斗争を担う
不屈の戦斗的
同盟を建設せ

先進的学友は民学同に結集せよ！

——民主主義学生同盟の性格と任務——

民主主義学生同盟（略称、民学同）は六三年九月、崩壊した日本学生運動の再建と単一全学連をめざす先進的学友の手によって大阪の地に結成された。結成以来第四回大会（六五年三月）で全国化を達成したわが同盟は、関西学生運動の指導的中核にとどまらず、構革派学生運動の統一のヘゲモシとして、「激動の七〇年安保闘争を担う不屈の戦闘的政治同盟」として着実に前進しつつある。

わが同盟は発足以来、日本学生運動再建の新たな旗手として、諸闘争を闘い、同盟内外の偏向を克服しつつ力強く前進した。そして情勢の新展開に対応する闘いを、昨年の砂川基地拡張阻止闘争（五〜七月）、佐藤訪ベトナム—訪米阻止闘争（十〜十一月）、今春の核空母エンタープライズ寄港阻止闘争、王子野戦病院開設阻止闘争を、現地—学園ストを基軸に、最も戦闘的、大衆的かつ組織的に展開してきた。

Ⅰ 日本学生運動の伝統とその展開

民学同は六〇年安保闘争後の学生運動の分裂、全学連の崩壊、その結果としての輝かしい日本学生運動の伝統の断絶の中で、全学連の真の遺産を継承し、単一全学連結成をめざして組織された。

全日本学生自治会総連合（全学連、一九四八年結成）によって代表される戦後学生運動は、「平和と民主主義よりよき学園生活のために」を目的とし輝かしい足跡を印してきた。戦後学生運動の輝ける伝統の基礎は、全員加盟制自治会を基盤とする学生層全体の統一された運動〝層としての学生運動〟として展開されたところにあった。そしてそれがレッド・パージを大学においてのみ唯一阻止し得、あるいは全学連第二創世期を築いた砂川闘争から勤評、警職法、安保闘争を展開する原動力となった。

一九六〇年以降に始まる今日の学生運動の混乱の要因は、民青とトロツキズム諸派の相互補完による〝層としての学生運動〟と「自治会運営における批判の自由と行動の統一」の否定に端を発し、佐藤内閣の重層的体系的政治反動の展開課程で「課題の一致」すら実現しえず、加えて弾圧体制の強化の中で、戦術問題における意見の分岐から発生した政治諸潮流間運動に転化していったことである。

Ⅱ 民学同結成の必然性

以上に述べた混乱と分裂を克服し、〝層としての学生運動〟の戦闘的再生と単一全学連の再建を果す為には、戦術方針まで具体化された正しい政策に導かれた全国的大衆的学生同盟が不可欠である。分裂が長期に汎っていることの原因の一端は、その様な指導部隊が強固なものとして存在していなかった事である。学生運動の特質が、全国性と先進性（行動性）に存在するが故に、四年一サイクルの自治会活動サークル活動の経験知識継承発展させるものとして、全国的政治同盟の必要性が存在するのである。いかなる学生政治同盟が必要なのか。それは一言でいえば政党から相対的独自性を確保しうる「自主的組織」であり、〝層としての学生運動〟の指導的中核隊部である全国単一の、民主集中制に支えられた戦闘的大衆的学生同盟である。民青並びにトロツキズム三派（社学同、マル学同中核、社青同解放）では、歴史が示す如く、その任務を果しえない。民学同こそが以上の歴史的任務を担いうる唯一の組織である。では以上の学生運動の任務を支える同盟の目的と性格はいかなるものか。

Ⅲ 民学同の目的と性格

我が同盟の理論的党派性は平和共存と反独占民主主義に集中的に表現される。

従ってわが同盟の第一の任務は、ドル危機とベトナム危機に集中的に表現される戦後世界帝国主義体制が根本的動揺期への突入が、未だ一挙的に世界革命に到達しえない今日的力関係の中で、過渡的移行形態として提起された平和共存論に基づき諸帝国主義の侵略と抑圧政策に対決する社会主義諸国後進国民族解放闘争並びに先進国人民の国際反帝統一戦線の有機的一翼を担う事である。かかる国際主義的任務を担う道は、とりもなおさず自国帝国主義政府に対決することによって果される。

第二に、七〇年アジア核安保体制樹立のための本格的海外侵略期に照応した政府・独占の国内政治反動—圧法体系の拡大解釈と行政権力の強権的発動体制に対決し、労働者階級を中心とする反独占統一戦線の一翼として闘う。我々の語るべき〝民主主義〟は戦後二十年間に形成された、いわゆる、戦後とである。民主主義への総依存ではなく、防衛的かつ政治的なものにとどまらず、社会、経済における構造改革をも闘いとる積極的かつ攻撃的な性格をおびるそれであり、反独占民主主義なのである。

第三に、「自主規制路線」と総称される教授会をはじめとする内からの大学自治破壊と、度重なる官憲の学内侵入に反対し、学生自治権の拡大を通して、大学の民主的改革を実現する。その中で、最近の政府の大学への攻撃をはねかえし、七〇年安保の拠点を確保しなければならない。

第四に、現代独占の反動的イデオロギーである「近代主義」（プラグマティズム実存主義）と国民的合意形成を名目とする大国主義、ナショナリズムに反対し、学生の中に生み出されつつある非合理主義とエゴイズムを克服すること、そして全ゆる進歩的、民主的な文化・スポーツ・サークル活動の自主的発展のために、同盟は科学と民主主義の思想を強固に打ち固めることを自らの使命としている。

そして最後に、以上の目的と任務およびそれを実現するための科学的な政策に導びかれつつ、全国全自治会を結集する単一全学連、それへの接近形態としてのベトナム反戦安保粉砕全国学生自治会共闘七月結成に向け全国的に統一された〝層としての学生運動〟の戦闘的再生を果すことこそわが同盟の最大の任務である。

Ⅳ 民学同の性格

以上の様な目的と任務を果すべき組織、即ち「激動の七〇年安保闘争を担う不屈の戦闘的政治同盟」を建設しつつあるわれわれは戦闘性、大衆性、科学性、民主性に支えられた組織を必要としている。わが同盟はそこらを自己の基本性格としている。

戦闘性と大衆性の同時的獲得の必要性が、現地—学園ゼネストを展開すべき学生運動にとって必須不可決の条件となっている。民青派の「あらゆる要求主義」によるスブズブの「大衆性」によっては闘えない。また「棍棒・投石戦術」によって情勢が切りひらかれると幻想するトロ三派の擬似戦闘性でも闘えない。民青、三派の運動論は結局、〝層としての学生運動〟の基盤たる自治会の統一機能を阻害する以外の何物でもない。

われわれは訪米阻止闘争における大阪市大、エンター闘争における岡山大学のストライキ—現地闘争の有機的連関性を継承させつつ生産点闘争と現地闘争それ自体の論理をさらに深化させ具体的闘いの中で、より一層戦闘性と大衆性の今日的あり方を解明するであろう。

政策から具体的戦術まで下降された行動方針の作成時における科学性、並ぶに全同盟討議に基づく全同盟的な強固な意志統一による全同盟的実践を展開する民主中制の確保は、決定的重要性を帯びつつある。主観的情勢分析から世界革命論を論じ、物理的肉体的「実力闘争」を提起する非科学的方向断固排撃する。

民主性とは以上の全てを集約するものとしてある。我々の獲得すべきものは反独占民主主義であり、我々の立脚点が科学と民主主義の立場であることーそれが同盟の民主主義的性格を不可欠の構成要素としている理由である。

わが同盟が民主主義学生同盟として登場した根拠は、かかる意味での民主主義—反独占民主主義を自己の基盤としているからである。

情勢の新展と我が同盟の左転換

ジョンソン声明は、米帝の危機をまざまざと見せつけた。かかる戦後世界帝国主義体系の危機を生み出したドル危機とベトナム危機の同時的進行は、今や根底的動揺再編成期に突入した事を明らかにした。

危機と激動の時代を背景に、我が同盟は、情勢の新展開に対応する再編成—体質転換を客観的に要請され、砂川闘争以降の諸闘争の中で、それに応えた。しかし、七〇年安保闘争の激動に耐えられない一部右翼日和見主義分子は脱落していったかかる事態を克服し我々は第九回大会で「激動の七〇年安保闘争を担う戦闘的政治同盟」建設への巨歩を進めた。昨秋の訪ベトナム—訪米、本年度初頭の核空母エンタープライズ寄港、今春の王子野戦病院闘争を最も原則的かつ戦闘的大衆的に闘い抜いた我が同盟は、三派「全学連」の小ブル急進主義と、民青並びに我が同盟から脱落していった右派分子の徹底した日和見主義を単なる言葉の批判でなく、現地自治会共闘の発展を支え、具体的闘いの中で、彼等の誤りを克服し始めた。中核派が現地動員主義に陥いったにも拘らず、訪米における全国唯一の大阪市大スト、エンター闘争で事実上のストライキを展開した岡山大学の生産点闘争と自治会共闘による現地闘争という典型的闘争で応え、危機と激動の時代に真に対決する方向性を示した。加えて四月闘争方針を七十年安保闘争戦の中で位置ずけうるまでには、六五年日韓以降の二年余の苦渋に満ちた過渡期を経ていたのである。同盟の歴史は次の三時期に区分される。①同盟結成〜日韓闘争（六五年十一月）②日韓闘争〜訪ベト・訪米③訪ベト・訪米以降現在まで。

第一期の特徴は、我が同盟の地方的同盟を脱却し、同盟の全国化を実現してゆく飛躍期であり、大阪府学連・兵庫県学連・京都府学連のいわゆる関西三府県学連運動に支えられた時期である。この時期は、ベトナム—日韓という内外情勢の転期に至るまでの、世界資本主義の「相対的安定期」の末期である。かつ日本資本主義が五五年から始まる「高度成長期」の末期に相当しており、戦後二十年間に形成された〝平和と民主主義〟の意識に立脚し、〝層としての学生運動〟論に基づく自治会の統一機能の発揮と典型的クラス組織論によって大衆運動を高揚させうる時期だったのである。そして単一全学連を支える学生同盟として、五〇年代の反戦学同の位置を占めるものとして我が同盟を位置付けることが出来た。しかし六四年十二月の民青「全学連」結成は、重要なこの前提条件の一部を崩したのである。

第二期　日韓闘争を突破口とする日帝の本格的海外進出と我が同盟の過渡期

日本資本主義の基本動向は、①六四年〜六五年の過剰生産恐慌ならびに国際資本自由化に対する集中合併②ベトナム戦争に規定されている。世界資本主義の相対的安定期の崩壊の開始と高度成長の破綻は池田政治の終焉を告げ、佐藤内閣の登場を促した。独占支配の構造的脆弱性は、基幹産業労組の抱き込みと、政治闘争の拠点粉砕・正面突破策を採用に踏みきらせた。最良の政治外被たる議会を通じた政治反動から、行政権力の発動による政治反動へと重点を移行させた。ここに至って、社共を中心とする日帝の本格的海外侵略の突破口たる日韓闘争は議会主義的対応に終始し、政府・独占にさしたる打撃を与えることなく敗北した。戦後「平和と民主主義」に全面依存し、民族主義的に日韓を把握した社共両党、過剰生産恐慌→日韓の図式で捉えた右翼日和見主義分子は、ベトナム—日韓闘争として組織しえず、みじめな政治的破産をとげた。（本格的他民族抑圧国家＝日帝と対決しうる唯一の道は、独占ののど元の生産点ストを軸とする全人民的政治闘争以外にない。）学生戦線もまた、日韓を契機に三分解されていった。民青の政治過程からの脱落、トロ諸派による六六年の三派「全学連」結成として。

第三期…内外情勢の転換と我が同盟の左転換

既に指摘した如く、内外情勢の激動的再編成に対応する我が同盟の転換は羽田—佐世保—野戦闘争を闘う中で、新たな支部建設と全同盟的同質化を実現することによって実現していった。既に腐朽化過程に突入していったが、六七年以降の七〇年安保前段闘争から脱落するのは必然であった。日米共同宣言以降の質的に新たな段階を把握しえず、かつ官憲の強権的弾圧の前に、合法主義の枠にのめりこんでいった。彼等は訪米阻止闘争において、反戦青年委員会、自治会共闘と敵対し、かつエンター闘争、野戦闘争から脱落、我々の寄生的存在でしかないことを証明し、民青に続いて政治過程から脱落しようとしている。

我々は一部日和見主義者の脱落にも拘わらず、二百五十名の動員によって三・二八〜四・一王子野戦粉砕闘争を展開し、他の構改派政治諸潮流無党派活動家を揺り動かし、三五〇名の自治会共闘部隊結成の原動力となっていった。我が同盟は、危機と激動の時代を背景に、一大転換をとげ、六八年春の階級闘争を闘い抜き、ベトナム—沖縄—七〇年安保闘争に着実に連前進し、単一全学連結成—全学第三創世期の展望を切り開く推進者となるであろう。

激動の七〇年安保闘争を闘おうとする全国の先進的新入生諸君！

民学同に結集し、七〇年安保を担う、不屈の戦闘的政治同盟を共

関西大学支部結成宣言

全国の闘う先進的学友諸君！

今年一月闘われたエンター闘争は、その持つ重味を、全人民的に明らかにしたであろう。にも拘らず、全国学生戦線がいまだ統一した運動と、先駆的役割を充分に発揮しえていないことを卒直に認めねばならない。不幸な学生戦線の分裂にあって、単一全学連を志向し、第三期全学連の創世期を担うべく登場した全国学生自治会共闘は、昨年、二度にわたる羽田闘争、一月エンター闘争を通じて、実に学生運動を止揚する水路を切り開いた。

分裂と混迷の学生戦線にあって、とりわけ関大における闘いは、残念ながら民青「全学連」が形式的に占める多くの学部自治会の闘争放棄と、少数の三派系の街頭主義闘争という二極分解の中で、関大の全学友は、層としての学生運動を展開する不屈の学生同盟の登場を緊急に必要としている。

我々民主主義学生同盟関大支部は、商学部自治会を基軸として、平和組織である、平和のための学生委員会を確立し、一方クラスにおける未組織活動家の連絡会議を強化・再編しつつ、クラスに根づいた原則的運動を最期までやり抜くことを決意する。

一九六八年三月二十日

民主主義学生同盟関西大学支部